

演劇を地域文化の活性化に活かす
—小松市波佐谷小学校で実演された朗読劇「やすな」の例より

有賀沙織 ARUGA Saori (KASSAY代表)

2007年10月19日、朗読でよみがえる地方の伝説「やすな」が、石川県小松市の波佐谷小学校の体育館にて実演され、児童、保護者、教職員、地元住人など250人の来場を得た。私はここで脚本執筆と製作に関わったので、脚本家としての視点で実演に至るまでの一連の経緯を報告するとともに、当日の模様を映像で紹介した。

石川県小松市出身の東宝現代劇女優・大川婦久美より、『小松市に残る伝説「やすなが淵」を地元の小学校で朗読劇というかたちで紹介する予定であるが、伝説はそのままでは整合性に欠けているため、朗読劇用の脚本が必要だ。』と私たち東宝演劇アカデミー劇作家養成講座3期生に脚本執筆依頼がきた。

朗読劇は、文化庁による「学校への芸術家等派遣事業」の助成を得て実現した。朗読は小松市出身の大川が、音楽、照明、チラシデザインについては、其々その道の専門家が担うこととなったが、脚本については私を含め4人のアマチュアが取り組むことになった。脚本家4人は小松市出身でもない。私たちは「加賀能登の伝説」(角川書店)の中の「やすなが淵」を原作として捉え、地元の文化について調べて、児童向け、保護者向けの2本の脚本を書き上げた。児童向けの脚本は、この地域に残る浄土真宗の思想と情景描写を盛り込み、伝わっている通りの伝説をできるだけ忠実に再現することに努めた。一方、保護者向けの脚本は、創作的な要素を多く含ませ、女の怨念の恐ろしさを前面に打ち出した。実演の翌日、この活動は北國新聞社によって紹介された。

今日の社会における「語り部」は、テレビやラジオ、インターネット動画などが挙げられる。だが、これらの媒体が持つ大きな特性は、“新しいこと”を伝えるということではないだろうか。一方、地域の伝説を朗読劇として実演することは、“昔のこと”を伝えることにほかならない。朗読劇は、古くて新しい「語り部」と位置づけられよう。